

越中の安政大地震

安政5年2月26日（1858年4月9日）午前2時、突如烈しい地震が富山城下町を襲った。深夜、眠りを破られた人々は、よろめく足を踏み締め、争って屋外へ脱出した。家々は大音を立てて舟のように揺れ、土蔵の壁は崩れ落ちて家屋を潰した。道路は箱段のようにでこぼこになって各所で裂け、その裂け目から水を噴き出し、辺りを水浸しにした。

富山城は各所で石垣が崩れ、土塀が倒れ、橋が落ち、大木が根こそぎ濠に倒れ、城壁も無数のヒビ割れを生じた。当夜、空は火事のように赤かったという。地震に伴う異常現象であろう。火災が発生しなかったのは不幸中の幸いであった。

富山城下町だけで藩士の家318、民家1872、土蔵40が全潰または半潰。高岡でも古城の石垣が崩れ、大木が根返し濠に落ち、川原町などで地裂けて水を噴出した。高岡全町で185軒損潰。大きな地の割れ目は御旅屋通り（現在も最繁華街）から桜馬場を横切り下関（JR高岡駅付近）まで突き抜け、この割れ目は半年も塞がらなかったという。

富山では諏訪川原町、高岡では川原町が最も噴砂噴水激しく、川原と付く地名の危険性を示している。越中平野の低湿地帯——富山市水橋地区や射水地域はほとんど全村、液状化現象を生じた。

この地震は跡津川断層の活動によるもので、推定マグニチュード7、推定震度富山で5以上という。越中・飛騨両国で地震は猛威を振るったが、被害は加賀・越前にも及び、金沢郊外に新設されたばかりの冬瓜橋が落ち、金沢よりも西に遠く離れた地がかえって被害大で、粟ヶ崎（石川県小松市）で民家60余、大聖寺（石川県加賀市）で民家500余、蔵300余が倒壊し、丸岡町（福井県）で家200、蔵70ばかりも破損したという。

北飛騨地方（岐阜県）で家屋全潰319、半潰385、死者203。越中から飛騨に通ずる神通川沿いの道は各所で山崩れのため交通途絶した。

地震の時神通川は一時大減水し、やがて高波となって押し寄せ、漁舟を転覆させ、舟橋を流失さ

せた。河口近くの浜で津波が発生し、行方不明者が出たというのは、神通川の急激な増水の影響で海も高波を起こしたのであろうか。

小矢部川奥の袴腰山・臼中山が崩れ、川を塞ぎ止めたが、下流23ヶ村の村人が総出で徹夜で土砂を切り崩し、排水に成功した。庄川奥でも土砂が突き出したが、これは川を塞ぎ止めるまでには至らなかったという。

最大の災害は「大^{おおとんび} 蔦崩れ」であった。立山カルデラが大蔦・小蔦など各所で崩壊し、莫大な土砂が常願寺川上流の湯川・真川両川を塞ぎ止め、満々と泥水をたたえた。3月10日・4月26日の2回にわたってこれが崩れ、凄しい土石流は下流めがけて殺到し、富山平野を泥海とした。この泥洪水災害は震災そのものより激甚で、加賀藩領では138ヶ村、収穫高2万5,800石の田地を廃滅させ、流失・倒潰・泥込み家屋1,652軒、土蔵・納屋886棟、溺死者140人、負傷者8,945人に及んだ。富山藩領では18ヶ村、7,350石の田地が壊滅、58軒が泥付き流失。鮎川も全橋流失した。常願寺川から取水していた21の用水は第一回の泥洪水で埋没し、その復旧作業中に第二回の泥洪水が押し寄せたため、370人もの人足が犠牲になったという。

この災害の生々しい体験記が『地水見聞録』。著者は富山藩部級（八百石）の滝川海寿一瓢と推定される。その自筆稿本は富山県立図書館の所蔵。藩お抱えの狩野派絵師木村立嶽が数枚の挿絵を描いている。土蔵・家屋が崩潰し、寝込みを襲われた町民が全裸半裸のまま逃げ惑う姿、大地が裂けて水を噴き出し、そこへ人々の落ち込む姿、避難民の野宿の姿、神通川が高波となって押し寄せる状況などが迫真の絵筆で描き出され、震災記録として誠に貴重である。なお立嶽は明治以後は政府に重用され、天皇御寝室の絵を描いたほどの画家であった。

廣瀬誠／富士女子短期大学客員教授／元富山県立図書館長

土蔵破
損ノ跡圖

大地より水が
湧く
圖

市中破裂略図（治水見聞録挿し絵）／富山県立図書館所蔵

市口破裂
零落

大震動、砌逃退之圖

